

## 西会津町上谷地区『天空の郷プロジェクト』

宮城教育大学 仙台いぐね研究会

庄子 元

### I はじめに—西会津町上谷地区の概要—

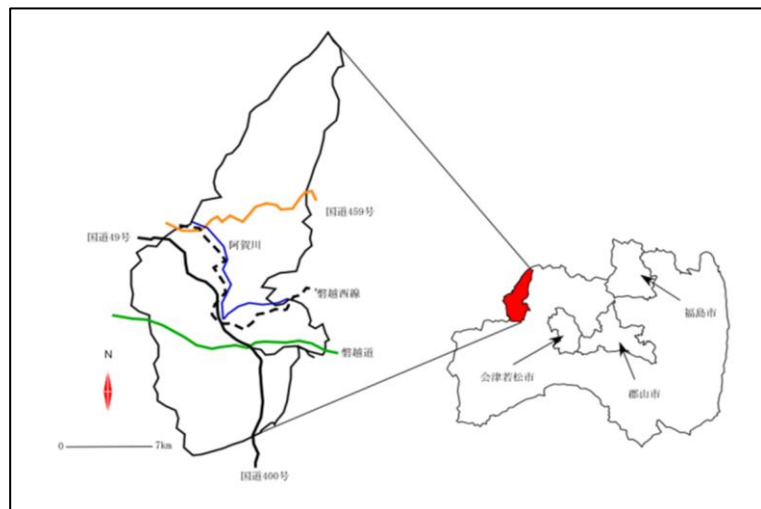
福島県西会津町は福島県北西端に位置し、福島県喜多方市、柳津町、会津坂下町、金山町、新潟県阿賀町に隣接している。西会津町の面積は 298.13 km<sup>2</sup>であり、2011 年では 7211 人が居住している。

西には越後山脈が走り、北部には飯豊連峰が雄大な景観を形成している。このため西会津町では町の総面積のうち、105.67 km<sup>2</sup>が山林である。この豊かな山林に恵まれていることで、西会津町は古くから木材の産地であり、江戸時代には木材確保のためにしばしば幕府の直轄地となっている。木材の中でも西会津町は会津桐の大産地であり、全国的にも良質な桐の産地として有名である。また山々に囲まれていることで、西会津町では携帯電話やテレビなど電波による情報、通信網の整備が困難な土地柄でもある。しかし西会津町にはケーブルテレビに住民の 9 割を超える世帯が加入しており、西会津町における情報の伝達に果たしている役割は大きい

河川についてみていくと（図表 1）、西会津町の中央を流路延長が 19000m の阿賀川が流れ、この阿賀川に向かって山々から 13 の支流が流れ込んでいる。このため西会津は豊かな水を恵まれているといえる。河川における水に恵まれた地域であるだけでなく、西会津町は降水量も多い。日本海側の気候であるために冬季間の降雪量は多く、1968 年 2 月 4 日には最深積雪量である 228cm を記録した。そして 2000 年から 2009 年における平均の降雪量は 12 月では 111cm、1 月では 227cm となっており、西会津町は町全域が豪雪地帯対策特別措置法によって 1971 年に特別豪雪地帯と指定されている。

西会津町は国道 49 号線が通っており、この国道 49 号線が町の主要道路となっている。また国道 49 号線と並行し、太平洋側と日本海側を結ぶ磐越自動車道が 1990 年から 1997 年にかけて開通した。西会津町でも西会津 IC が 1996 年に供用を開始している。この磐越自動車道によって西会津町と福島県会津地方の中心地の 1 つである会津若松市が結ばれ、40 分程度で会津若松市に行き来できるようになったのである。また磐越

図表 1 西会津町における河川・交通網



自動車道は福島県最大の都市である郡山市ともつながっている。この郡山市とも西会津町はほぼ1時間で結ばれている。このため西会津町周辺の市町村と比較しても交通条件はよいといえる。

恵まれた交通条件にありながらも西会津町では少子高齢化が深刻化している。西会津町の人口は1955年の179,557人をピークとし、それ以降は一貫した減少を示してきた。特に高度経済成長期には減少幅は最大となり、1970年には2207人も人口が減少した。しかし人口の減少速度は鈍化し、1995年では277人の減少となっている。この減少幅の縮小は人口減少の社会減が鈍ったことによる。人口の社会減は鈍化したものの、近年では再び人口減少は拡大傾向にある。2000年には770人の減少、2005年には838人の減少となっている。この減少幅の拡大は人口の自然減によるものであり、西会津町では現在、2回目の人口減少の荒波にさらされている。人口の自然減が加速するとともに西会津町では高齢化の深刻化も見受けられる。1960年の高齢化率は8.7%であったが2005年には39.7%にまで拡大している。

本事業の対象地域である西会津町上谷地区は、程窪集落、泥浮山集落、長桜集落、小杉山集落の4集落で構成されている。この上谷地区は少子高齢化傾向にある西会津町の中でも深刻化している地域である。上谷地区の人口は男性28人、女性35人であり、世帯数は24世帯となっている。いずれの集落でも世帯数は10世帯未満であり、非常に小さな集落である。また高齢化の深刻化も顕著であり、高齢化率は泥浮山集落の100%を筆頭に、程窪集落50%、小杉山集落50%、長桜集落44.4%である。集落が小規模であることに加え、高齢化が深刻化していることで集落存続へ危機感を持っている。また集落の標高も高く、300mから500m程度に集落が位置している。標高が高いことで積雪量は豪雪地帯である西会津町内でも多く、雪下ろしは住民の大きな負担となっている。このように山に抱かれた地域でありながら交通条件には恵まれている。西会津町の中心地域である野沢地区からは車で15分程度であり、西会津ICからも近い。このため山に抱かれながらもアクセスが良好であるという特色を持った地域となっている。

## II 地域資源の『再認識』・『再評価』

私たちが上谷地区に集落活性化事業で訪れ、最初に行った取り組みが地域資源の『再認識』である。集落の方とともに私たち大学生が集落を歩き、集落の見どころ・お宝を発見することから始めた。この地域資源調査によって上谷地区には多くのお宝があることが明らかとなった。

まず大きなお宝は『湧水』である(図表2)。上谷地区の各集落には湧水があり、と

図表2 上谷地区の湧水



でも冷たくおいしいものであった。この湧水付近にはワサビが自生しており、このことも私たちを驚かせた。しかしすばらしい湧水はあるものの水飲み場や歩道の整備はされておらず、汲みに行くことは困難であった。また湧水を示す看板もなく、来訪者が水を汲むことは不可能といってもよい。

次に発見した地域資源は『歴史的な景観・建造物』である。上谷地区はかつて大地震で被害を受け、消滅かけたところから再建した集落である。この大地震の慰霊碑があり、重要な歴史資源といえる（図表3）。また上谷地区では昔は養蚕に多くの家庭が従事しており、名残である2階建ての古民家が多く残っている。この古民家も地域の歴史を示すものであり、非常に重要な資源である。また水量が少ないながらも水を活用してきたバッテリーもあり、これらの歴史資源も大きく活用できる可能性を秘めていた。

図表3 大地震の慰霊碑



また山に抱かれた地域ということで『山の幸』が豊かであった（図表4）。この山の幸も上谷地区の地域資源のひとつといえるだろう。写真にあるようなナメコ、シイタケ、キクラゲの栽培が盛んであり、前述の天然ワサビを使った生キクラゲのワサビ醤油あえを頂いたこともある。この料理はまさしく上谷地区の恵みそのものといえる。キノコ以外にもワラビやタラの芽、ゼンマイなどの山菜、クルミに代表される木の実は豊富であり、都市部からすれば贅沢な素材が容易に確保できる地域である。

図表4 原木栽培のナメコ



このように上谷地区は豊かな地域資源を有する地域であるものの、住民の方は地域資源であるという認識は持っていなかった。そのため最初の地域資源調査では「お宝なんてない」、「こんなどこにでもあるだろう」などといった声が多く聞こえてきた。豊かな地域資源も地域に長く居住している方からすれば『当然』となっていたのである。


そのため私たちは地域資源調査で明らかとなった地域資源を整理し、皆で確認することにした。このため私たちは集落ごとのグループに分かれ、集落住民の方とともに『お宝マップ』と呼んでいる地域資源地図を作成した。この『お宝マップ』作りによって集落の方に当然であると思っていたものが、実は地域資源であるのだと再認識していただいた。また集落での認識から4集落合わせた地域としての認識にするため、地域内で発表会を行い、集落のお宝を地域のお宝として再認識した。この地域資源調査、お宝マップ作りは『よそ者』である大学生が住民の方と共に行うことで大きな成果があり、住民の方に地域資源として再認識していただくことができた。

2年目である平成23年度は、これらの地域資源を活用する段階へとステップアップし、いずれの集落にもあり、上谷地区全体の地域資源ともいえる『湧水』、『山の幸』に注目した。まず『湧水』の活用であるが、住民との方針会議では「水飲み場を整備する」、「歩道を手入れする」といった意見も出されたものの、来訪者が利用する第一歩ということで水質調査を行った。その結果、飲料としては適さない地点もあったものの地域内で5か所の湧水が飲料用として適していることが明らかとなった。またこれらの湧水は極端な軟水であることもわかり、安全な水と証明されただけでなく、湧水の希少性も科学的に明らかになった。今後は意見にも出された整備を進めるつもりである。

次に『山の幸』の活用としては上谷地区のレシピ集を作成した(図表5)。上谷地区には会津の郷土料理で有名な『こづゆ』、西会津町特産である『車麩』を使用した料理など、実に豊かな食文化が残されている。しかしこれらの料理についても前述の地域資源と同様に住民の方は『豊か』であるという認識は持っていなかった。そのため最初の訪問で出された夕食がカレーであったことは、今では地域の方と私たち大学生の間では笑い話となっているほどである。この認識も変えるため、夕食や懇親会で振る舞われる料理の配置を変えた。上谷地区料理展覧会と称し、1つのテーブルにまとめるバイキング形式としたのである。テーブルにたくさん並べられた料理を見て、住民の方は「こんなに料理があったのか」と言っていた。そしてこの料理展覧会に出された料理をまとめたものがレシピ集

図表5 車麩のレシピ

**車麩の揚げ物**



**《材料》**  
 車麩、卵、片栗粉、ごま、青のり、油、砂糖  
 醤油、酒、水

**《下ごしらえ》**  
 ・車麩を水にひたして柔らかくする。  
 ・砂糖、醤油、酒を1:1:1で混ぜる。

**《料理手順》**  
 ・水でもどした車麩を、片栗粉をまぶして揚げる。  
 ・つゆに漬け込む。  
 ・好みでごまや青のりをまぶす。

**《地元食材率》**  
 40%

である。レシピ集には材料、手順のほかに下ごしらえも記載した。下ごしらえまで記載した理由は、山菜をはじめとする上谷地区の食材の大部分が豊かな『山の業』によって調理されていたからである。この『山の業』についてもレシピ集に記載することで『山の業』を知らない来訪者にも伝えることができると考えたのである。『山の業』に加えて、レシピ集には『地元食材率』も記載しており、上谷地区の料理はいずれも『地元食材率』が高い。地産地消が日本全国で叫ばれ、大きな注目を集めている現在、上谷地区は料理だけでも十分注目される地域なのである。

### Ⅲ 休校・廃校から『地域拠点』への転換

上谷地区における活動で私たちは上谷小学校を拠点として行動している。この上谷小学校は現在(平成23年度)、休校となっているが、平成24年度に廃校となる。この上

図表6 休校となっている上谷小学校

谷小学校は上谷地区のほぼ中央に位置しており、集落間のアクセスが良好な場所である(図表6)。また校舎内部の状態もよいことから、この上谷小学校を地域拠点へと転換できないかと考えた。しかし一言で地域拠点への転換といっても転換するベクトルは様々である。集会場のように集落内における交流の拠点や農家レストランのように外部との関わり合いの拠点となるものから、



宿泊設備を備えたものまで幅広く活用例はある。住民の方に「地域拠点として活用しよう」という提案をした際には、多くの住民が乗り気ではなかった。マスメディアによって宿泊施設や農家レストランとして転換された事例が多く取り上げられており、自分たちではできないという意識があったからである。

このため私たちは本当に不可能なのか確認してもらうため、休校・廃校利用の先進地視察を行った(図表7)。視察地域として設定したのは山形県金山町の『谷口がっこそば』という施設であり、現在はその名の通り地域のそば屋として活用されている。この『谷口がっこそば』へ地域住民16名、大学生4名で視察を行った。金山町は町をあげて歴史的な景観整備を行っており、家の建築などを行う場合、伝統的な住居様式で建てれば補助金を交付している。このように歴史的な景観を積極

図表7 『谷口がっこそば』を視察



的に保全している町でもある。そして林業が盛んであったこともあり、上谷地区の方々は嬉々とした表情で視察を行っていた。『谷口がっこそば』の庄子さんから転換した経緯をおいしいそばとともに聞いたのだが、『谷口がっこそば』を運営しているみなさんはもともと商売としてそば打ちを行っていたわけではない。そば打ちを行っていたとしても家庭内のものであった。

上谷地区は現在、一部の農地に関してソバの作付けが行われている。しかし耕作放棄地における前の土地利用を調べていくと、以前はそばの栽培が道路沿いを中心に活発に行われていた。そして上谷地区の70代後半から80代の方々は地域内でそば打ちを行っていたことも明らかとなり、そば打ちの技術も上谷地区には眠っていた。今回の視察によって上谷地区の方々が自分の地域でもそばを振る舞えると感じていただけたことは大きな前進であった。

また『谷口がっこそば』は基本的に休日のみの営業である。地域で家庭を持ち、農業をはじめとする仕事を持っているので無理をしない営業形態となっている。そしてこの無理をしないというスタンスから『谷口がっこそば』には笑顔が溢れ、他地域から多くのお客さんが来るものの、地域内における交流の場ともなっている。視察前はマスメディアの影響などから宿泊施設や農家レストランに関して、来訪者を重視して考えていたのだが、視察を通じて地域住民を重視し、無理のない形でよいのだと目で見て、雰囲気を感じられたことは上谷地区のみなさんに大きなインパクトを与えた。そして実際に話を聞くことで廃校を転換することに対して現実味が生まれ、帰りの車内ではどのように活用するか活発な意見が交換された。

今回の視察を通じて上谷地区の地域拠点として、まずは地域住民が集まれる場にしようという計画になった。その後事業が進み、地域外から来訪者が来た際には休憩ができる場を提供し、それから上谷地区の『湧水』を利用したお茶を振る舞ったり、お茶請けとして地元の山菜などを提供しようという動きになっている。これらの段階を経て最終的にはそば打ちを復活させて、そばを提供していこうとまとまった。視察を通じ、具体的なイメージのもとで決して自分たちの負担とならないような地域拠点への転換、段階的な転換が模索されつつある。

以上が今回の視察を通じての収穫であったが、この視察自体にも私たちが考えていなかった効果があった。それは地域のイベントとして視察がとらえられたことである。今までは集落単位でイベントを行ってきたのだが、集落を超えて上谷地区としてまとまった活動は少なかった。こういった中で今回の視察は上谷地区として行ったイベントであり、視察後には上谷地区としての結束が強まったことは、私たちにとって予想外の収穫であった。

#### IV 集落外を巻き込んだ『天空の郷プロジェクト』

最近では『限界集落』という言葉がテレビ、新聞で多く用いられる。『限界集落』とは集落住民の50%以上が65歳以上の高齢者であり、集落機能の維持などが困難となり、集落消滅の可能性が現実のものとなった集落のことである。この『限界集落』は大野晃氏によって1980年代後半に提起されたものであり、現在上谷地区の4集落のうち、3集落は『限界集落』となっている。しかし私たちが2年間、上谷地区の方々と活動してきた中で『限界』を感じたことはなかった。私たちの何倍ものスピードで山を歩き、丹念にキノコを育て、田んぼを耕し、視界のほとんどが雪に埋まるような豪雪であっても、雪かきを行って家を守っている。とても消滅に向かう集落といった印象は受けなかった。この『限界集落』という問題に対して山下祐介氏が著書の『限界集落の真実』の中で、1980年代後半に『限界集落』という問題提起がなされ、現在まで20数年経っているものの、人口の減少や少子高齢化を理由に消滅した集落は表れていないとの報告がなされている。そしてこの報告を受けて『限界集落』は今後対応しなければならない未来にお

けるリスク回避であると示された。まさしく上谷地区もこのような状況にあり、今すぐに消滅してしまうような様相を呈してはいない。しかし少子高齢化は深刻化し、今後の集落運営、地域運営の持続に関しては危機感を持って考えていかなければならない状況にある。

そこで私たちは地域資源の活用、廃校の地域拠点への転換を核とした事業に対して集落外に居住している子ども世代、孫世代を巻き込んだ形で運営主体をつくることを目指した。これが『天空の郷プロジェクト』である。現在は道路、高速道路、新幹線など交通網の発達により、地域間における時間的な距離は縮小してきている。特に上谷地区は西会津町の中心である野沢地区から近いだけでなく、西会津町を福島県の都市である会津若松市、郡山市と結ぶ玄関口である西会津町 IC からも近い。

こういった点を踏まえて子ども世代、孫世代の居住状況、帰省頻度を調査する『親戚ネットワーク』調査を行った。この調査の結果、確かに上谷地区の各集落では集落規模も小さく、少子高齢化が深刻であるものの、多くの子ども世代、孫世代が帰省していることがわかった。そして帰省の目的も日々の世話や農業を行うためなど、集落の生活が集落外に居住する親戚ネットワークによって支えられていることが明らかとなった。上谷地区の一つである長桜集落を例にとれば、長桜集落は6世帯しかいないものの、週単位、月単位で帰省して集落を支える親戚ネットワークは11人もいる。この調査ではおよそ上谷地区には50人ほどの親戚ネットワークが存在していることが明らかとなった。

こうした親戚ネットワークを含めて、現在では『天空の郷プロジェクト』は進められている。その一つがラベルの作成である。西会津町には道の駅があり、西会津町の野菜や山菜などが販売されている。上谷地区にも道の駅へ出荷している方が何人かいるのだが、販売の際に上谷地区の景色とともに『天空の郷』というネーミングで売り出していることが話し合われた。しかし少子高齢化が進む上谷地区では、パソコンを使ったラベル作成は困難である。こうした状況を支えてくれたのが親戚ネットワークであり、写真のラベルは集落外に居住する息子から送られたものである（図表8）。

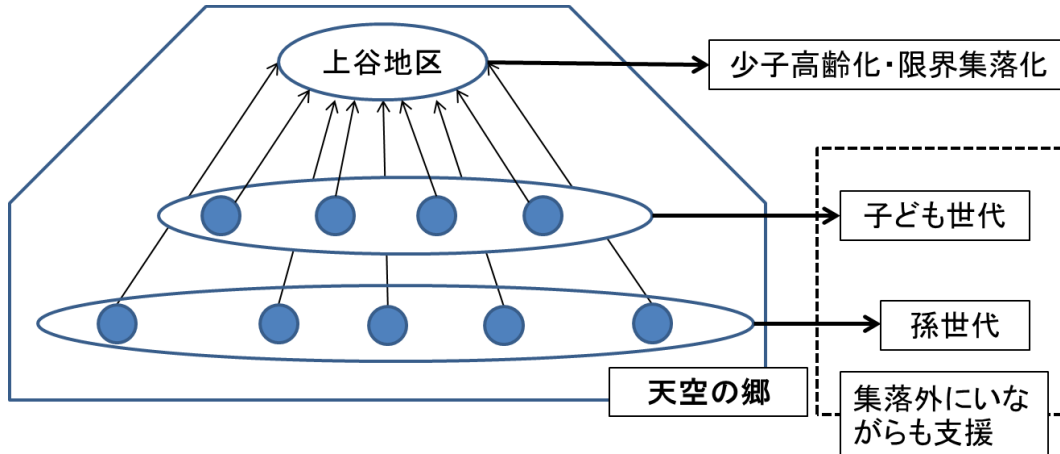
このような高齢化した中では困難である作業を担ってもらうほか、親戚ネットワークには地域との関わりを持続させる狙いもある（図表9）。旅行者や観光者などを呼び込

図表8 『天空の郷』ラベルをつけたクルミ



めるのは、身内である親戚が帰ってきたくなる地域でなければならないという認識のもと、子ども世代や孫世代とともに活動中である。

図表9 『天空の郷プロジェクト』モデル図



#### V 結びにかえて—西会津町に広がる活性化の波—

最後に私たちが上谷地区で行っている取り組みは町内のケーブルテレビを通じて、盛んに放送された。その結果、西会津町の他地域でも集落活性化の刺激を与えることができた。この町内全体での集落活性化の動きにともなって、西会津町の各地区、町役場、私たち大学生を交えた『活性化事業シンポジウム』が開催され、互いに学びあう場となった。

上谷地区をはじめ、西会津町では高齢化率が高くなり、『限界自治体』となる可能性もある。しかしこの学びあい、集落活性化の波を持続させていければ集落が活性化することは夢ではなく、各地域に影響をそれぞれが与えることで西会津町がまるごと活性化できると考えている。